

10 施 肥

標準施肥量及び施肥時期は第II-127表のとおりである。標準施肥量は10a当たり窒素14kg、リン酸6kg、カリ10kgとする。また、施肥時期は、基肥として10月上旬に全量の80%を施用し、残りの20%を収穫後に追肥として施用する。なお、施肥量は、個々の園地の地力や樹の観察を行いながら増減する。

第II-127表 標準施肥量及び施肥時期

成 分	標準施肥量 (kg/10a)			施肥時期	
	~3年生	4~8年生	成木 (9年生~)	10月上旬 (基肥)	収穫後 (追肥)
窒 素 (N)	5	10	14		
リン酸 (P ₂ O ₅)	2	4	6	80%	20%
カリ (K ₂ O)	3	6	10		

注) 標準施肥量は、個々の園地の最適量ではない。個々の園地の最適施肥量については、標準施肥量を基準にし、樹の観察を行いながら増減する。

11 生理障害とその対策

(1) ホウ素欠乏

ア 症 状

ホウ素が欠乏すると、うめでは果実が成熟するにともない、果頂部周辺が陥没し、日焼け様症状を呈したり、果面よりヤニを吹き出すことがある（やにふき果）。日焼け症は収穫時及び収穫後に発生が見られ、陥没周辺部の表皮や果肉が褐変し、果肉に空洞があることがある。これらの症状は大玉品種に発生が多く、小玉品種では少ない。あんずでは核の軟化、果肉の褐変やコルク化、奇形果や縮果が発生する。

イ 原 因

これらの症状はいずれもホウ素またはホウ素と石灰の複合欠乏により発生すると考えられている。

ウ 防止対策

酸性土壌で発生が多い。酸性土壌の改良と塩基補給のため、苦土を含む石灰質肥料やホウ素入り改良資材を施用する。毎年発生する園地では、10a当たりホウ砂を1~2kg施用する。

12 病害虫防除

うめ・あんずの主要病害として果実に被害が発生する黒星病、かいよう病がある。また、開花期の不順天候により灰星病の発生が目立ち、開花期の花腐れから伸展する小枝枯れや収穫期の実腐れがある。また、両樹種とも県南地方ではやませが多いと環紋葉枯病が大発生し、早期落葉することがある。害虫ではコスカシバによる樹勢衰弱や、ウメシロカイガラムシやアブラムシ類の発生が目立つ園地が見られる。

(1) 黒星病

ア 発生生態

病原菌はももの黒星病と同一である。本病は葉・枝・果実に発病するが、葉の発病は少なく、主に枝と果実に発病する。枝では緑枝のうちに濃緑色の小型病斑ができ、次第に赤紫色となる。病斑が古くなるとその中心部が灰色の輪状斑点になる。病原菌は枝病斑で越冬し、4月頃から病斑上に胞子を形成し